

# 1960年代の現代子どもセンター・母の会における家庭と教育への関心

—機関紙『子ども相談』にみる幼児・子どもの発達と教育の方法への着目から—

基礎教育学コース 渡 邊 真 之

Analysis of the growing interests in the family and education in 1960s in Japan  
—Considering the activities of *Gendai-Kodomo-Center Haha no kai*—

Masayuki WATANABE

The purpose of this paper is to examine the growing interests in the family and education in 1960s in Japan, by considering the activities of The Modern kids & youth culture Research Center mother's association (*Gendai-Kodomo-Center Haha no kai*, 1965-1967).

In the first chapter, the author describes the relationship of mother and education during high economic growth period in Japan. In the second chapter, the author analyses the activities of The Modern kids & youth culture Research Center mother's association, by examining their newsletters. In third and fourth chapter, the author discusses the features of the newsletters. In the last chapter, the author gives a new viewpoint that revisiting the history of postwar education in Japan.

## 目 次

### 1. はじめに

- (1) 高度経済成長期における教育への「私的」な関心
- (2) 現代子どもセンター母の会のなりたち
- (3) センターにおける母の会の特色
- (4) 資料の性格と本稿の構成

### 2. 『子ども相談』の特徴と性格

- (1) 『子ども相談』への投稿者
- (2) 『子ども相談』における企画と特集
- (3) 『子ども相談』に紹介されたサークルづくりと研究会

### 3. 「母」の相談と啓蒙—幼児・子どもの発達への関心とその視点の相対化—

- (1) 教育関係者による「母」の相談への応答
- (2) 子どもと社会の現況を知る「母」

### 4. 教育の方法への関心—母親の子ども観・教育観への揺さぶり—

- (1) 母親の子ども観をずらす子ども・教育の思考の紹介
- (2) 理数系の教育の方法の紹介

### 5. まとめにかえて

### 1. はじめに

本稿の目的は、1960年代半ばにおいて教育関係者・児童文化関係者らによって組織された現代子どもセンター・母の会における、幼児・子どもの発達と教育の方法への着目を通じた家庭と教育への関心のあり方について明らかにすることにある。

現代子どもセンター・母の会（以下、「母の会」）は、1962年5月に一連の「現代っ子」論を提唱した阿部進らが中心になって設立された児童文化団体である現代子どもセンター（以下、「センター」）の内部に、1965年5月につくられた組織である。母の会では、センターに加わっていた教育関係者（現役の教師や元教師、教育学者など）や児童文化関係者（児童文学者など）らが中心となって、幼児から中学生程度までの子どもをもつ母親を対象に、子どもの現代的状況を示す資料の提示や母親による子どもの悩みなどの相談、最新の教育の方法の紹介などさまざまな教育情報を提供していた。

### (1) 高度経済成長期における教育への「私的」な関心

教育学において、教育への私的な関心との微妙なせめぎあいに基づく教育の公共性は、常に中心的なトピックであり続けてきた。このとき、従来の研究にお

いて、高度経済成長期における子どもと教育への関心の拡大は、家族—学校教育—企業社会の連関が形成されていくことを前提としつつ、子どもと家族（とくに「母」の子どもへの役割）の変容に焦点を当てた議論がなされてきた。

例えば小谷は、従来は都市中間層の子どもたちに限られていた子ども期の享受が高度経済成長期に大衆化していき、都市の核家族化の進展と多数の家事専従者の誕生に伴う「女性たちのエネルギーの莫大な余剰」が教育ママを誕生させたとしている<sup>1)</sup>。

一方で本田は「教育ママ」のライフコースに着目している。本田は高度経済成長期の「教育ママ」コーホートの特徴を分析し、これらの世代が「子どもに対して伝統的な子育て規範や慣習を適用でき」ず、それゆえ「表面的達成としての学歴」や「外部機関や即物的手段に頼る結果」を招来したことを指摘し<sup>2)</sup>、いわゆる「教育ママ」の行動選択へのつながりを指摘している。ここでの本田の指摘は、教育ママを社会変動の単なる結果や「悪い母親」像への還元するのではなく、新中間層の教育への関心の拡大が世代や社会状況に規定されつつも主体的な選択として登場したことが示唆されており、重要である。

こうした教育ママの存在と行動を下支えたのが、いわゆる幼児教育産業や教育産業といった幼児・子どもの教育への商業的かわりであった。とくに1960年代半ば以降にはいわゆる幼稚園ブームの到来に加え、早期教育への関心の高まりも指摘されている<sup>3)</sup>。

早期教育に代表されるような幼児・子どもの教育への商業的かわりについては、かねてから批判されてきた。例えば汐見は、日本において商業的支援が拡大していったことを批判的に捉えている<sup>4)</sup>。その一方で、汐見が「子育て」の公共性を主張するにあたって、「本質的には経営している人間やそこで働いている人間が、自分たちの仕事をどれだけ公的なものとして自覚してやっているか」と論じるならば<sup>5)</sup>、このような商業的支援と教育の公共性の複雑な関係性は果たして「自覚」の問題として理解できるのかどうかについて、さらなる検討も要されよう。

先述の小谷は高度経済成長期の松田道雄や遠山啓などを例に挙げ、彼らがメディアを通して良質な教育情報を発信し悩む人々をエンパワメントする活動をしたと評価しつつも、彼らの活動の基底にあった「[合理的]な育児・医療や教育方法」という手法自体は、結局は工業化する社会のアンチテーゼにはなりえず、むしろ「人々の功利的な関心に応える部分があったから

こそ」社会的影響力を持った側面があると指摘する<sup>6)</sup>。小谷の指摘をふまえれば、「良質な」子ども・教育言説の語り手の次元（この場合は松田や遠山ら）ではなく、結果として市場を通して教育情報が提供され消費される関係が生じてしまったことに目が向けられる必要が生じてくる。

むしろ、教育への関心は「私事」にとどまるものではないし、「私事」を超え出でるつながりと可能性の探求は、戦後の教育学と教育実践において主要な課題であり続けてきた。ただ、このような子ども・教育への関心の拡大について、とくにその情報を実際に提供した側の論理と活動に即して具体的な検討がなされてきたわけではない。

## (2) 現代子どもセンター母の会のなりたち

先述したように、母の会は、1962年に阿部進らが中心になって設立されたセンターの内部に1965年につくられている。そもそも、センターとは、以前拙稿で取り上げたように、既存の児童文化運動が有していた教育的子ども観に対抗しつつ、「現代の子ども」について分野横断的な子ども研究に取り組んだ組織であった<sup>7)</sup>。センターの内部に作られたさまざまな組織のなかで、幼児教育や母親への関心を集約して新たにつくられたのが母の会であった。なお、母の会については、先述した拙稿においてすでに取り上げたことがある。ただ、母の会のセンターにおける大まかな位置づけに触れたのみであり、その具体的な活動内容や同時代における特色などについて十分には触れられなかった。本稿は母の会の活動と論理を詳細に検討するにあたって、まず母の会のなりたちとその特色について説明したい。

センターの幼児教育への関心は、1964年ごろから高まりを見せた。1964年にはセンター内部に、「この会での研究成果を、具体的に幼稚園で実験し、創造の観点から新しい幼児教育の展望を切りひらこう」との目的から幼児教育研究会がつくられている<sup>8)</sup>。意欲的な活動が目指された幼児教育研究会では、実際に実験幼稚園の設立が計画されていた。実験幼稚園では「創作、音楽、童話、遊具、玩具、絵本などの同人の創作物」の使用に加えて、センターの活動とのかかわりにおいて「数・言語など科学的概念の形成における幼児段階での基礎訓練をおこなうこと」、「今日の幼児教育が知育偏重の傾向が強いのに対して情操教育（幼児の美意識の発達）を重視すること」が目指されていた<sup>9)</sup>。

こうした活動に並行して、センターは幼児・子ども

を持つ母親への積極的なアプローチを展開している。幼児教育研究会の発足と同時期に、センターは日本経済新聞社と共催で「幼児教育セミナー」を1964年4月から6月にかけて計3回開催している<sup>10)</sup>。それぞれ、「幼児の情操を豊かにする」(筒井敬介)、「幼児の才能発見」(早川元二)、「幼児の知的発達」(阿部進)といったテーマと講師によるセミナーは、「約六百名の申込みがあったので、あわてて会場を大ホールにきりかえる」ほどの大盛況だったという。このような「幼児教育に対する母親の関心はひじょうに大きい」ことを目の当たりにしたセンターは、母親を対象とした教育セミナー・教育情報の提供をさらに充実させ、「センターの幼児教育研究活動の進展とも相まって、組織的、系統的な幼児教育運動を展開すること」を目指すようになった<sup>11)</sup>。

以上の背景を経て、1965年5月5日に母の会は発足した。その発足を伝える記事には、母の会の目的として「かしこく、たくましく、心ゆたかな子どもを育てるための科学的で具体的な児童観や教育方法を身につけること」、「お母さん自身の教養を高め、よりよい母親として主体性を確立」すること、「子どもたちに、美しく豊かな児童文化をつくり与える」という三点が掲げられている<sup>12)</sup>。活動の詳細として、会費が月額50円であること、会員の特典として月刊機関紙『子ども相談』を受け取れることのほか、個別教育相談、講演会、映画会などの事業活動に優先的に参加できることなどが挙げられていた。母の会の現状として「すでにお母さん方への入会申込がつづいている」と紹介され、「この会を全国的なお母さんの組織にひろげ、教育、児童文化専門家と母親との交流を、系統的、組織的におこなうことをめざしている」とその目標も記されている<sup>13)</sup>。実際に母の会の活動では、「お母さんの育児・教育資料」と銘打たれた機関誌『子ども相談』に加え、センターの同人らを講師としたセミナーや研究会の開催、夏休みの林間学校が開催されていた。

なお、母の会の活動がいつ、どのように終了したのかについては不明である。ただ、1967年ごろには、母の会の運営そのものが行き詰まっていたことが誌面からうかがえる。『子ども相談』第23号の編集後記には、母の会事務局による言葉として「ふえる一方の赤字をかかえて大変困っています」と会の現状が述べられるとともに、「母の会のたてなおしに、いま事務局では必死になっています」と率直に記されている<sup>14)</sup>。研究会やセミナーなど催し物の開催が難しくなっている事情も併せて触れられており、「悪しからずご諒承の上、

気長に待っていただければ」と記されている。その後、母の会が財政的・運営的に「たてなおし」、活動を再開させたのかは不明である。ただ、1967年前半期には活動が困難に直面していたことは事実であり、本稿ではこれをふまえて、母の会の活動の分析対象期間を1965年5月～1967年5月までの2年間と限定する。

なお、母の会の会員名簿などは確認できていない。ただ、読者からの投稿や研究会の対象などを総合的に判断すれば、母の会の主要な読者は子ども(幼児～小学生を中心に、中学生まで)をもつ母親であったことは想像に難くない。また、東京地区のみならず、東海地方や福井県、横浜市などにも母の会の支部があったことが記されている。

### (3) センターにおける母の会の特色

センターでは、母の会の結成以前から母親による子どもや子育てへの疑問に応答する活動をしていた。センターの発足に前後して、阿部らを中心とした著作『わが子に強くなりたい親へ』(伊藤忠彦、阿部進、湯山厚編、明治図書、1962年5月)の刊行を皮切りに、1964年には早川元二・秋山ちえ子を編著者として『家庭教育の疑問に答える』(三一書房)、1965年4月には阿部の著書として『問題持つ子の教育相談』(明治図書)、同じく65年4月には現代子どもセンター家庭教育研究会の編著として『子どもの才能の伸ばし方』(明治図書)、1965年8月には教育学者の勝田守一と阿部の編著として『学校教育の疑問に答える』(三一書房)が出版されている。こうしたセンターの著作は、母親の子育ての疑問に応じたり教育情報を提供した母の会の原型として捉えられる。

その一方で、センターの活動の中心は分野横断的な子ども研究であり、同人たちの研究・交流活動の拠点であることが目指されていた(そもそも、センターの同人には子どもの母親はほとんどいなかったと推測される)。こうした母親の子育てへの疑問に応答する活動は、センターの活動からすればあくまで付随的なものであった。

センターを母体として設立した母の会ではあるが、母親を対象として教育情報を提供し母親を積極的に組織しようとした点、研究会やセミナーなどを通して母親同士のつながりを促した点、小中学生のみならず幼児にも着目した点において、センターとは異なる特色があった。

#### (4) 資料の性格と本稿の構成

本稿は、母の会の活動と論理の展開を検討するにあたって、母の会の機関誌であった『子ども相談』を主な分析対象とする。機関誌『子ども相談』では、誌上での相談に加え、教育の方法や子ども論についての教育情報の提供、児童読物や児童文学の紹介などがあり、母の会の主要な活動やその記録が網羅されている。『子ども相談』は全体で20頁弱ほどの小冊子であり、それぞれのトピックや記事が見開き1～2頁ほどの分量で掲載されている。

ただ、資料的制約から、本研究が分析対象とできたのは、『子ども相談』第3号（1965年7月）、第6号（1965年11月）、第11～23号（1966年4月～1967年5月）までである<sup>15)</sup>。

母の会の活動と主張を検討するにあたって、本稿は以下の構成をとる。第2節では、本稿が主要な分析対象とする機関誌『子ども相談』の特徴について、投稿者や特集、機関誌に掲載された研究会などの整理を通して明らかにする。第3節では、母の会の活動の特色の一つである子どもの発達への関心に基づいた「母」の相談と啓蒙に焦点を当てて、その展開を明らかにする。第4節では、二つ目の特色である教育の方法への関心について取り上げ、教育や子ども研究の知見がどのように紹介されたのかを検討する。最後には、本稿の議論をまとめたうえで、今後の展望を記す。

## 2. 『子ども相談』の特徴と性格

本節では、母の会の機関紙である『子ども相談』の特徴と性格について明らかにすることを目的とする。「お母さんの育児・教育資料」と銘打たれた『子ども相談』は、子どもを持つ母親への教育情報の提供が主要な役割であった。このとき、誰によって、どのような教育情報が提供されたのか、母の会の活動と論理

を明らかにするうえで重要である。

そこで、まず『子ども相談』への投稿者を明らかにし、センターと母の会の人的連続性とそのかわりについて検討する。続いて、『子ども相談』において実施された多様な企画と特集を整理し、その特徴について分析する。最後に、『子ども相談』に掲載された研究会や合宿などの情報についても網羅的に記す。なお、先述したように、資料的制約もあって、ここで対象とした『子ども相談』は3、6、11～23号に限定されている。

#### (1) 『子ども相談』への投稿者

先述した期間での『子ども相談』への投稿者は、読者投稿も含めれば計37名を確認できる。その多くは教育関係者と児童文化関係者であった。そこで、投稿回数を集計し、主要な執筆者について整理した（表1参照）。投稿者は、それぞれの活動や所属先などをふまえて、A：教育関係者（教師や教育学者など）、B：児童文化・児童文学関係者、C：その他（主婦や企業関係者など）、に分類した。ただ、次に述べるような執筆者の性格もあって、執筆回数上位者には、Cに分類される者は結果的にカウントされなかった。

以上の表1をもとに、執筆上位者の特徴を分析してみたい。執筆上位者は、次項で述べる特集の連載をもっていた者だったが、執筆者からみる『子ども相談』の特徴は次のようなものであった。

一つは、『子ども相談』の執筆者は教育関係者、児童文化関係者が中心であったことである。もともとセンターは教育や児童文化といった従来の教育運動・児童文化運動の枠組みを超え、詩人や映像作家などを加えた分野横断的な子ども研究を試みたことが大きな特徴の一つであった。ところが、『子ども相談』の執筆者は、むしろ教育関係者、児童文化関係者が中心であり、これはセンターの目的や同人の構成とは異にして

表1：掲載回数の多い執筆者一覧（筆者作成）

分類	氏名	職業	投稿回数	センターとのかかわり
B	佐野美津男	児童文学者	17	センター常任理事
A	阿部進	元教師	15	母の会事務局長、センター常任理事
A	伊藤忠彦	教育学者	15	センター理事
B	子ども調査研究所調査部	団体	12	センター内部の調査機関。高山英男所長
A	小林実	総合教育研究所員	6	
B	小沢正	児童文学者	5	
A	栗原九十郎	教師	5	
B	斎藤次郎	子ども論者	5	センター事務局



いる。

第二に、基本的には執筆者が固定化されていた。2年にわたり『子ども相談』に連載を抱えていた執筆者(A:阿部, 伊藤, B:佐野, 子ども調査研究所研究部)が『子ども相談』の主要な執筆者であった。こうした執筆者はセンターの中心人物でもあったことから、教育関係・児童文化関係のセンターの中心人物が、『子ども相談』の執筆にあたっていたこともうかがえる。ただ、センターの活動にはそれほど積極的に加わっていたわけではないものの、小林実(理科教育)や栗原九十郎(算数教育)のような教育の方法に専門した実践家による執筆もみられる。

## (2) 『子ども相談』における企画と特集

以上のような執筆者の傾向をふまえたとき、『子ども相談』はどのような記事を掲載することで、いかなる教育情報を読み手である「母」に提供しようとしていたのだろうか。

『子ども相談』では、毎号にわたってさまざまな特集が組まれていた。『子ども相談』発刊から1年が経過した第12号(1966年5月発行)からは、それ以前の同誌とは特集の内容が変化している。ただ、先述したように、基本的には主要な執筆者による連載が中心であること、執筆者は連続していることから、本稿では2年間にわたる『子ども相談』の記事を次の三つのカテゴリーに分類した。

一つ目に、①「母」の相談と啓蒙である。主に母に

よる子どもの発達への関心に基づく疑問への応答であったり、母に子どもの現状や社会のありようを示す記事をここに分類している。二つ目に、②教育の方法への関心である。教育学や子ども学への関心に加えて、算数教育や理科教育など具体的な教育方法への関心が紹介されていた。三つ目に、③児童文学関係である。同人による創作に加え、子どもに読み聞かせたり母の関心を広げるような図書の紹介が行われていた。3つのカテゴリーにそれぞれ該当する記事は、以下の通りであった。

①「母」の相談と啓蒙には、「母」を対象とした相談や記事などを分類した。とくに、教育関係者が母の子育ての疑問に応える「子ども相談室」や当時幼稚園に勤務していた阿部進による「ススムの幼児探検」は、ほぼ毎号にわたって連載されたことから、『子ども相談』の中心的な連載だった。さらに、センターの内部につくられていた子ども調査研究所による、現代社会における子どもの実態と消費社会における子どもについて描いた連載があった。加えて、「お母さんの社会見学」という連載では、「子ども・教育に限らず、お母さんの社会的な知識を豊富にする」ことを目的として<sup>16)</sup>、スーパーや流通(コールドチェーン)、アニメーション制作の現場などについて、それぞれの業界に詳しい人物による解説がなされている。

②教育の方法への関心では、当時横浜国立大学に所属していた伊藤忠彦が、これまでの子どもの見かたを転換させるような新しい子ども研究の紹介した「現代

表2:『子ども相談』における主要な特集(筆者作成)

特集名	回数	主な執筆者	記事の題目の例
①「母」の相談と啓蒙			
子ども相談室／ススムの幼児探検	15	阿部進, 水野茂一, 横川嘉範	「夏休みの幼児相談」, 「子どもに心服される法」, 「幼児の話においつこう」
あなたの子どももここにいる／母と子の商品学	12	子ども調査研究所調査部	「子どもとマンガ」, 「子どものおやつ」, 「子ども服の話」, 「CMの商品学」
お母さんの社会見学	9	斎藤次郎, 秋谷重男	「コールド・チェーンの話」, 「アニメーションのできるまで」, 「テレビ「ちびっこのど自慢」をめぐって」
②教育の方法への関心			
現代子ども学講座／新・教育学講座	15	伊藤忠彦	「子どもとく信号」, 「教育目的論」, 「教育内容論」, 「教育方法論」
おかあさんの算数教室／母と子の理科学習	10	栗原九十郎／小林実	「分数の話」, 「量と集合」, 「量をしっかりつかむこと」, 「“動く”ことを調べる」
③児童文学関係			
母と子のための童話	14	佐野美津男, 小沢正, 三田村信行	「オオカミをみた」, 「朝, 学校へ行くまえ」, 「ごはん食べる人形」
母と子の本棚	12	佐野美津男	「人間とは何かを考えるために」, 「八月＜戦後＞を考えましょう」, 「女と戦争について」, 「日本人という問題」

子ども学講座」，教育学の方法論をわかりやすく紹介した「新・教育学講座」に加え，現役教師らによる教育方法の紹介である「おかあさんの算数教室」，「母と子の理科学習」などの連載があった。とくに，「おかあさんの算数教室」では，当時水道方式をめぐる注目を集めていた数教協の常任委員だった栗原が執筆している。栗原による研究会・セミナーは複数回にわたって開催されるなど，読者の関心も高かった。

③児童文化関係では，児童文学者による創作である「母と子のための童話」に加え，佐野による児童文学書や関係図書の紹介がなされた「母と子の本棚」が連載されていた。なお本稿では，創作のお話が多いことや，児童文化・児童文学関係者の主張が必ずしも十分に読み取れない記事構成になっていることをふまえ，③児童文化関係の連載や記事については検討の対象とはしない。

### (3) 『子ども相談』に紹介されたサークルづくりと研究会

また『子ども相談』には，以上のような記事にあわせて，母の会が開催した研究会やセミナー情報なども掲載されていたほか，母親同士のサークル活動も行われていた。

母の会の会員は，各地でそれぞれサークルをつくるのが推奨されていた。例えば，母の会設立当初には，東海地方で会員が百名近く増えたことに触れつつ，「名古屋，愛知県郡市，三重，岐阜の会員のみなさん，小さな集会を持ってください」と呼びかけられ，複数のサークルが結成され次第「事務局から講師を派遣し

て研究会をやりたいと思います」と述べられている<sup>17)</sup>。実際に，横浜市内で結成されたサークルの一つである「横浜市平沼・岡野町サークル」には40名ほどの会員があり，7月には伊藤忠彦を招いて例会が開かれたことも併せて報告されている。のちには，東海地方の自主的なサークルの世話人が決められたことも報告されているほか<sup>18)</sup>，横浜地区のサークルの例会の案内が掲載されていた<sup>19)</sup>。会員である母親同士がそれぞれの地域でつながり，母の会に対して積極的に関与することがうながされていた。

加えて，各種のセミナーや研究会，林間学校のほか，人形劇や映画の試写会への招待なども積極的に開催されていた。以下の表3は，『子ども相談』に案内された母の会主催の各種研究会・セミナーである。

このように，1965年～66年にかけて，母親を対象とした研究会・セミナーが複数開催されていたほか，林間学校の開催もみられる。

ただ，このような公開研究会なども，徐々に運営に困難を抱えていった。1966年ごろには，研究会の申し込みが多数にのぼり募集を締め切ったこともあったが，実際に来場したのは「毎回20名くらい」であり「出席者があまり多くなかった」と記されている<sup>20)</sup>。母親の出席率の低さに，事務局が頭を悩ませていたことがうかがえる。

また，1966年夏を最後に，機関紙『子ども相談』において母の会主催による研究会の告知がみられなくなる。とくに，先述したような1967年以降における母の会の財政的・運営的「たてなおし」のなかでは，研究会の実施もままならなくなっていったことが推測され

表 3：母の会で主催した企画の種類と概要

企画名	日時	講師	テーマ
幼児教育の公開実験授業の会	1965年11月17日	阿部進	数や言葉の指導や遊戯などの実際の授業を行い，幼児教育のポイントを公開
お母さんのための算数研究会	①1965年10月16日	栗原九十郎	幼児の数概念と小学校低学年の応用問題
	①11月27日	栗原	同上。(盛況のため同一の企画を再企画)
	②12月4日	栗原	小学校中・高学年の算数
子どもの情操を高めるお母さんセミナー	①1966年3月16日	佐野美津男	母と子のマンガ学
	②4月8日	小沢正	童話の作り方・話し方
	③4月20日	石井賢康	おもちゃの選び方・与え方
幼児教育の公開実験授業	①1966年6月18日	「ゆかり文化幼稚園の先生方」，佐野	ゲームとおはなし
	②7月8日	栗原	数の問題
	③7月19日	阿部	幼児のことばとしつけ
夏休み林間学校	①不明		長野県白樺湖畔
	②1966年8月11～13日		神奈川県秦野市丹沢国民宿舎，先着50名（小学3年～中学生まで）

る。

### 3. 「母」の相談と啓蒙—幼児・子どもの発達への関心とその視点の相対化—

本節では、『子ども相談』の記事内容のうち、前節で分類した「「母」の相談と啓蒙」に該当する記事に焦点を当てて、その内容と論理を分析する。こうした記事では、母親の幼児・子どもの発達への関心に基づいた内容が組まれたと同時に、母親たちの教育的な視点を相対化しようとする意図も見られた。

#### (1) 教育関係者による「母」の相談への応答

幼児・子どもに関する相談への応答は、主に教師などの教育関係者によって担われていた。こうした相談に共通したのは、母親たちの悩みに共感を示しつつも、母親による子どもへの教育的な関心を和らげようとする姿勢であった。

例えば小学校教師だった横川は、『夏休みには欲ばるな』—先生からお母さんへ—と題した文章で、子どもの夏休みの過ごし方や親の声のかけ方などについてアドバイスしている。横川は、子どもたちが楽しみにしていた夏休みが「いやになってしまう」理由について三つに分類して、夏休みを有意義に過ごすための計画の重要性についてアドバイスしている。「夏休みは、健康第一」であること、「なにか誇りになること、友だちに自慢できること、夏休みでなくてはできないことをひとつだけ決めて、それに取り組むこと」が重要であるとアドバイスを行ったあと、「欲ばらないこと、ひとつのことをやりぬくこと、という指導によってこの長い夏休みを有意義に過ごすことができるのだ」とまとめている<sup>21)</sup>。横川は子どもが夏休みを「有意義」に過ごすにあたって、母親による適切な「指導」の重要性をふまえた応答をしている。

また別号において阿部も、夏休み明けの子どものあり方についての質問に対し、子ども自身の「カンや友だちとの集団的なうごき、仲間意識の復活」するため、勉強に文句をつけるといったことではなく「運動会に子どもをかりたて」ることが重要だと提起する<sup>22)</sup>。ここでは、子どもの接し方に迷う母親に対して、母親の子どもへの働きかけを肯定しつつ、母親とは異なる子どもへの視点を提供しようとする阿部の意図がうかがえる。

中学校教師だった吉村は、中学生の生活と学習のあり方についての母親からの質問に回答している。「う

ちの子は急になまいきになったようですが、みなそんなのでしょうか」という母親の質問に対して、吉村は「中学生になってなまいきにならない子どもがいたらすこし発育がおくれているか、一寸かわった子ですね」と母の悩みを受け止めながら、「なまいきになるのはあなたのお子さんの成長した証拠です」と記している<sup>23)</sup>。

このように、母による相談への応答にみられたのは、母親からの相談を受け止めつつ、子ども自身の感性や論理を重視する姿勢である。例えば『子ども相談』第6号において阿部は、小学校3年生の子どもが友だちと遊ぶ時間について質問した母親に対し、学校以外の場での生活の重要性を指摘している。阿部は、友だちと「あそんでいる時間だけが友だちとあそぶことになりませんよ」、「たとえ5分しか友だちとあそべなくても、往復に30分、50分かけるもの」だという子どもの考え方を示し、「学校以外のあそびが、子どもを育て、力づくしていく」ことへの自信をもつよう呼びかけている<sup>24)</sup>。ここでは、母親に寄り添いつつ、学校以外の子どもの姿や子どもの遊びなど、子ども自身の論理を積極的に評価し、母親にその論理への気づきを求める姿勢が垣間見える。

子ども自身の論理を重視する姿勢は、阿部による連載「ススムの幼児探検」にも受け継がれている。この連載は、当時幼稚園で勤務していた阿部の「新しい体験を生かした幼児論」を載せるものだった<sup>25)</sup>。「ススムの幼児探検」は、幼稚園での阿部と子どもたちとのかわりのなかで、興味深いシーンを短くまとめた記事である。幼児たちの生活のなかに阿部が入りこみ、阿部の目を通して幼児たちの独自の論理が描かれている。幼児の世界の「探検」と題されたように、この連載では阿部の存在は教育者の視点としてではなく、不可知な世界を「探検」する存在として登場し、その未知の存在の探究が基本的なモチーフになっている。この連載では、阿部が本来有していた一連の「現代っ子」論に通底する視点に基づいて、幼児たちの世界と論理を母親に気づかせていくように構成されていた。

#### (2) 子どもと社会の現況を知る「母」

以上のような子どもの論理の発見と紹介を通した母の相談への応答に加え、母が子どもと社会の現況を知ることと同時に目指されていた。こうした目的がうかがえる連載が、子ども調査研究所調査部による連載「あなたの子どももここにいる」ならびに「母と子の商品学」であり、複数の著者による連載「お母さんの

社会見学」であった。

連載「あなたの子どももここにいる」は、子どものおやつやマンガなど、子どもにとって身近な商品などについての子ども調査研究所による実証的な子ども調査の結果を、わかりやすくまとめた記事であった<sup>26)</sup>。この連載は「現代の子どもの生活実態や価値観をとらえようところみ」たものであり、この連載を通して「お母さん方が、多少とも子どものことを客観視する習慣をつけてくださればありがたい」と記されている<sup>27)</sup>。なぜならば、「子どもは子ども独自のもののさしをもって」いるのであり、「親と子どもが人間どうしのつきあいをしていくためには、この子どものもののさしを正に理解」する必要があるからである<sup>28)</sup>。この記事では「君はどんな人になりたいか」や「いちばんたいせつにしているもの」といった価値観にかかわる子ども調査の結果が解説され、「この子どもたちのすがたのなかに、「あなたのお子さんもいる」のだと結んでいる<sup>29)</sup>。このように、子ども調査をきっかけとして、母親が子どもの世界と論理を知ることが目指されていた。

こうした姿勢を、子どもの商品の調査と研究という視点から深めたのが、後継の連載である「母と子の商品学」であった。この連載では、子どもの具体的な商品を手掛かりとして、商品から子どもの生活に加え日本社会を見直す企画であった。この連載も、子ども調査研究所による子ども調査をもとにしたものであり、具体的な商品からみえる子どもの世界を母親たちに紹介するという構成になっている。

さらに、連載「お母さんの社会見学」では、子どもにとって身近なさまざまな職場や仕組みがテーマとして取り上げられ、それが専門家によって手短に紹介されている。例えば、当時虫プロダクションに勤務していた丸山は、「アニメーションができるまで」という記事のなかで、アニメーションの具体的な製作過程や費用、今後の見通しなどを紹介している<sup>30)</sup>。さらに、電通PR局ディレクターの小倉は、「PR・PR・PR」と題した記事のなかで、PRとプロパガンダ、広告との違いや経営方針とPRの関係について紹介し、PRは「社会の利益になることもありますが、単に私利のためばかりの活動もします」とその役割について率直に記している<sup>31)</sup>。アニメやテレビ・ラジオにおける広告やCMのように子どもにとっても身近なテーマが、それぞれの分野の専門家によってわかりやすく紹介されている点に、同連載の特色があった。この連載は、「子ども・教育に限らず、お母さんの社会的な知識を豊富

にする」ことが目的にあった<sup>32)</sup>。

以上にまとめたように、「母」の相談と啓蒙に分類された連載では、母親に焦点を当てながら、相談への応答や子どもの身近な社会の裏側を知ることなどを通して、教育的な視点を相対化し、子どもへの新しい視点を提供することが目指されていた。

#### 4. 教育の方法への関心—母親の子ども観・教育観への揺さぶり—

前節でみたような母の相談への応答と啓蒙に加えて、『子ども相談』におけるいま一つの軸は、母親による教育の方法への関心に応え、専門家がそれらを紹介することであった。ただ、こうした記事においても、単なる現代の子どもの姿や教育学の知見の紹介にとどまらず、母親の子どもへの見かたをゆさぶることに焦点が当てられていた。

##### (1) 母親の子ども観をずらす子ども・教育の思考の紹介

横浜国立大学助教授だった伊藤忠彦は、川崎市の教師だった阿部などと懇意にあり、センターの理事を務めていた。この伊藤が執筆した連載が「現代子ども学講座」、「新・教育学講座」である。連載「現代子ども学講座」では、子どもの現状を批判的に捉える伊藤の視点が登場している。例えば、「デモの子ら」と題した記事において、伊藤はインドネシア動乱において子どもたちのデモがあったことを紹介しながら、日本の子どもたちがテストなどの教育状況のなかで「飼ひ馴らされているということ」だと記している。伊藤は重ねて、「子どもだって生活している」のであり、子どもが「デモをやってはいけなとか、騒いではいけないという方法はありません」と記している<sup>33)</sup>。ここで伊藤は、「デモ」を題材として、日本の子どもたちが現実の政治とのかかわりを失っていること、そうした子どもたちが「生活」を奪われていると指摘している。このように伊藤は、日本の子どもの現状を批判しつつも、母親の持つ子ども観を批判的に捉え、それらを揺さぶるような発言をしている。

母親の子ども観を批判的に捉え、揺さぶるような意図は、主に学校や教育学の事例に焦点を当てた後継の連載「新・教育学講座」においても引き継がれている。例えば、「第一章 教育目的論—その2—」と題された記事において、伊藤は具体的な目的・ねらいをたてることが学校教育や家庭教育において重要であるとし



ながらも、近年は「『進学』が大きな目的」になっており、「英文法の丸暗記が具体的目的といった教育が、あまりにも横行している」と、教育の目的が矮小化されていることを批判している。さらに伊藤は母親に向かって「何のための人生なのか、もう一度考えなおしたいものです」と述べ、「そして、子どもの成長に目をとめて、具体的な目的をたしかめたいものです」と記している<sup>34)</sup>。

このように試験や進学、知識を重視する教育への関心を批判的に捉える視点は、他の記事にも共通する。「第二章 教育の社会的基礎 その1」と題された記事においても、伊藤は地域社会や生活実態に即した学校教育が行われなくなったことを批判し、「その地方の具体的な生活を素通りして、本当の“政治”が、“社会”が“経済”が学習できるのでしょいか」、「具体的な事柄を通して、認識を確かなものにすることが、子どもの頃の教育には、一番大事なこと」だと主張し、いわゆる知識偏重の教育を批判する<sup>35)</sup>。

これらの連載では、伊藤は母親の子ども観や教育観—それらは往々にして知識偏重の教育やテストを重視するというステレオタイプなものでもあったが—を批判的に取り上げながら、母親たちに対してこれらとは異なる子どもや学校の見方を提供しようとしている。

## (2) 理数系の教育の方法の紹介

以上のように、母親の子ども観や教育観をずらす連載とともに、算数と理科の教育の方法を紹介する連載も組まれた。こうした連載を補強したのは、第1節でも記した公開研究会であり、算数や幼児をテーマとした研究会は、とくに母親からの関心も高かった<sup>36)</sup>。

このとき、『子ども相談』誌上においてこうした教育の方法への関心をささえたのが連載「お母さんの算数教室」と「母と子の理科学習」だった。前者は数教協常任委員だった栗原九十郎、後者は総合教育研究所所属とされた小林実を執筆者とした連載だった。

「お母さんの算数教室」の連載にあたって、「数学教育協議会の常任委員として、ご活躍している算数教育のベテラン」と執筆者の栗原が紹介され、「ご期待ください」と呼びかけられている<sup>37)</sup>。期待を集めた栗原は、教科書や教師の指導とは異なる数学的な思考方法と教え方を紹介している。例えば「0という数字」と題した記事では、無である数としての0は2年生の指導内容とされてきたとしながらも、0について適切に指導しなければ10という数について指導することは難しいと指摘する。栗原は「どうしても無の意味の0

を教えておかねばなりません」として、0の理解を深めるような具体的な指導の方法を紹介している<sup>38)</sup>。このように、栗原は数についての理解を深めることの重要性を指摘している。

こうした栗原の姿勢は、母の会が開催した幼児教育の実験授業研究会でもあらわれている。リンゴやミカンなど果物を子どもたちに数えさせながら、栗原は具体的な物と数の抽象性をつなぐことの重要性を指摘している。数を数えることよりも、「具体物と抽象的な数との関係」をはっきりさせることの方が重要であり、「3は3つのリンゴでも、3人の男の子でも共通する「かず」なのだということをわからせる方が、ずっとずっと大切なのだ」と栗原は述べていた<sup>39)</sup>。

このように、栗原の連載では、従来の指導方法や教科内容を批判的に捉えつつ、数の理解を深めることの重要性を主張している。一方で、連載の最後では母親たちに対して、「どうか無理強いをして算数をきらいにさせないようにすることが、まずたいせつでしょう」と結んだように、母親たちの熱心な子どもへのかかわりが子どもを算数嫌いにさせてしまうことへの危惧も表明している<sup>40)</sup>。

また、連載「母と子の理科学習」では、「身のまわりの具体例から自然科学の原理へ導いていく好シリーズ」と事務局から評されたように<sup>41)</sup>、子どもの周囲の具体的な物への着目から理科の理解の深化が図られた。例えば、小林は子どもの動くおもちゃを例にとりながら、「動くおもちゃは、その原理をたどれば、すべて何らかの科学と結びついています」として<sup>42)</sup>、物理的に「動く」とはどのようなことかについて、重力や雲、月などを例に挙げて物理運動を説明しながら、連載を通して解説している。最終的には、しかけのあるおもちゃや動くおもちゃ、ふりこの動きなどを解説することを通して、物理的に「動く」ことへの理解の深まりが目指されていた。各記事の末尾には二つの設問が設けられ、「母と子」がともに記事を読み、物理的な運動について考えることが目指されていた<sup>43)</sup>。

以上のように、教育の方法への関心に分類された連載では、母親が関心のある子どもや学校の現状、教育の方法について取り上げながらも、単にこれらの関心に応えるのではなく、母親のそうした関心をやや批判的に捉えずらしていくことが意図されたといってい

## 5. まとめにかえて

本稿は、1965年から67年にかけての母の会の活動と主張について、機関紙『子ども相談』を対象に検討してきた。第2節では、母の会の活動と『子ども相談』の特徴について検討し、『子ども相談』誌上の連載を①「母」の相談と啓蒙、②教育の方法への関心、③児童文学関係に分類した。第3節と第4節では、このうち「母」の相談と啓蒙、教育の方法への関心の二つについてそれぞれ取り上げ、それぞれの連載の特徴について分析した。

母の会の活動の検討を通して見えてきたことは、母の会の執筆陣たちが、受験・テストに向けた教育的関心や「よい子ども」像とは異なる視点を提供しようと腐心する姿であった。ただ、こうした視点の提供は、母親の子どもへの教育的関心に根本的に依拠していた。また、母の会が当初目指した母親同士の交流や母親と専門家との交流は、子どもに関する相談や研究会・セミナーという形で実施されることになったが、誌面からは母親たちとの交流を通して専門家らの教育論・子ども論が更新されていった様子は読み取れない。1967年以降の母の会の活動の停滞は、センターによる非教育的な子どもへの視点の提供と、母親の教育的関心とが決定的に折り合わなくなっていったことを示唆している。1960年代後半以降にはセンターの活動そのものが停滞していくなかで、中心人物だった阿部は「子どもらしさ」に回帰し母親たちの教育的な関心に阿るような教育書を手掛けていく一方、高山ら子ども調査研究所は実証的な子ども調査や若者文化、サブ・カルチャーへの関心を深めていく。

改めて振り返れば、高度経済成長期以降の「教育ママ」言説とは、中西が指摘するように二律背反的な側面を併せ持つ競争へと駆り立てるものであった。すなわち、「母親たちにより高度で幅広い配慮を要求しながら」、一方で「絶えず教育ママに転落せぬよう気を配る教育競争の世界に母親たちは否応なく誘導されて」いったのであり、いわゆる受験競争批判はこうした「配慮の競争」の領域を根本的に理解できなかったと中西は鋭く指摘する<sup>44)</sup>。こうした指摘をふまえたとき、母の会の活動と主張の検討からは、家庭による子どもへの関心にに基づきながら、「よい子ども」や学校教育（テスト、受験）への母親たちの関心をずらしていく試みが、「市場」（ここでは、学校教育の外側における、私的な教育に関する枠組みというあいまいな意味で用いている）を通して供給され消費されていくこ

とのジレンマに気づかされる。母の会の活動は、子育てを「私事」の問題に限定せず、「私事」としての関心にのっとりながら、非教育的な子どもへの目線を媒介として、母親たちとのつながりを構築しなおそうとする試みであった。しかしその目線は、教育的関心の高い母親たちを対象として、「市場」を介さざるを得なかった。それが1960年代教育史においていかなる意味をもちうるのかについて検討することは、今後の課題になろう。

## 注釈

- 1) 小谷敏『子どもたちは変わったのか』世界思想社、2008年、53頁
- 2) 本田由紀「「教育ママ」の存立事情」、藤崎宏子編『親と子—交錯するライフコース』ミネルヴァ書房、2000年、179頁
- 3) 早期教育をめぐるのは、これまで多様に定義され、取り上げられてきた。例えば無藤は、早期教育を「小学校以降の学校教育に類した方式や目標を持って、乳幼児期に子どもに意図的に教育するもの」と定義している。無藤隆『早期教育を考える』日本放送出版協会、1998年、12頁。他にも、椎名健「大衆化した「早期教育」—井深大『幼稚園では遅すぎる』他」、小谷敏編『子ども論を読む』世界思想社、2003年など。
- 4) 汐見稔幸『幼児教育産業と子育て』岩波書店、1996年、91-93頁
- 5) 同上、196頁
- 6) 小谷、前掲『子どもたちは変わったのか』、43頁
- 7) 渡邊真之「1960年代前半の児童文化運動における教育的子ども観の問い直し—現代子どもセンターにおける子ども研究をめぐる—」、『子ども社会研究』第28号、2022年6月
- 8) 「事務局だより」、『現代子どもセンターニュース』第10号、1964年6月20日、11頁
- 9) 「幼児教育研究会への招待」、『現代子どもセンターニュース』第11号、1964年12月1日、12頁
- 10) 「お母さんのための幼児教育セミナー盛会」、『現代子どもセンターニュース』第10号、1964年6月20日、10頁
- 11) 同上、10頁
- 12) 阿部進「センター母の会発足」、『現代子どもセンターニュース』第12号、1965年6月1日、1頁
- 13) 同上
- 14) 「編集後記」、現代子どもセンター母の会『子ども相談』第23号、1967年5月25日、17頁
- 15) なお、第3、6号については日本近代文学館、第11～23号については国会図書館にそれぞれ蔵されている。
- 16) 「編集後記」、『子ども相談』第12号、1966年5月、17頁
- 17) 「7月通信」、『子ども相談』第3号、1965年7月、17頁
- 18) 「3月通信」、『子ども相談』第11号、1966年4月、17頁
- 19) 「横浜地区の会員へ」、『子ども相談』第14号、1966年7月、17頁
- 20) 「4月通信」、『子ども相談』第12号、1966年5月、17頁

- 21) 横川嘉範『『夏休みには欲ばるな』—先生からお母さんへ—, 『子ども相談』第3号, 1965年7月, 1頁
- 22) 阿部進「子ども相談室」, 『子ども相談』第16号, 1966年9月, 16-17頁
- 23) 吉村徳蔵「中学生の生活と学習」, 『子ども相談』第3号, 1965年7月, 8頁
- 24) 阿部進「子ども相談室」, 『子ども相談』第6号, 1967年11月, 6-7頁
- 25) 阿部進「逃げる・見まわす・さぐりだす」, 『子ども相談』第17号, 1966年10月, 4頁
- 26) なお, 子ども調査研究所による子ども調査については, 渡邊真之「1960年代の子ども研究における消費の位置—子ども調査研究所による子ども研究の射程—」, 『教育学研究』第88巻第1号, 2021年3月
- 27) 子ども調査研究所調査部「子どものものさしを理解しよう」, 『子ども相談』第11号, 1966年4月, 12頁
- 28) 同上
- 29) 同上, 13頁
- 30) 丸山正雄「アニメーションのできるまで」, 『子ども相談』第15号, 1966年8月, 8-9頁
- 31) 小倉重男「PR・PR・PR」, 『子ども相談』第17号, 1966年10月, 6-7頁
- 32) 「編集後記」, 『子ども相談』第12号, 1966年5月, 17頁
- 33) 伊藤忠彦「デモる子ら」, 『子ども相談』第11号, 1966年4月, 10-11頁
- 34) 伊藤忠彦「第一章 教育目的論—その2—」, 『子ども相談』第13号, 1966年6月, 10-11頁
- 35) 伊藤忠彦「第二章 教育の社会的基礎 その1」, 『子ども相談』第14号, 1966年7月, 10-11頁
- 36) 数教協の栗原を招いて1965年10月16日に開催された「お母さんのための算数研究会」は好評で, 後日同じ内容の研究会が再び開催された。[10月通信], 『子ども相談』第6号, 1965年10月, 17頁
- 37) 「編集後記」, 『子ども相談』第6号, 1965年11月, 17頁
- 38) 栗原九十郎「0という数字」, 『子ども相談』第6号, 1965年11月, 8頁
- 39) 「数の暗誦よりも物との結びつきを—「数の指導」から—」, 『子ども相談』第15号, 1966年8月, 1-2頁
- 40) 栗原九十郎「量をしっかりつかむこと」, 『子ども相談』第15号, 1966年8月, 7頁
- 41) 「編集後記」, 『子ども相談』第17号, 1966年10月, 17頁
- 42) 小林実「“動く”ことを調べる」, 『子ども相談』第17号, 1966年10月, 8頁
- 43) 例えば, 小林実「“動く”ことを調べる」, 『子ども相談』第21号, 1967年2月, 8-9頁
- 44) 中西新太郎「受験競争から教育競争へ—企業社会下の教育問題」, 後藤道夫編『日本の時代史28 岐路に立つ日本』吉川弘文館, 2004年, 213-214頁